

テモテへの手紙第二4章1-8節 「任務の全う」

1A 御言葉の宣教 1-5

1B 主の前での命令 1-2

2B 耳を貸さない時代 3-5

2A 全うした者への報い 6-8

本文

テモテへの手紙第二 4 章です。これで、テモテへの手紙が終わります。前回私たちは、終わりの時には困難になり、見かけは敬虔であるけれども、その実を否定する人たちがたくさん出てきます。けれどもパウロは改めて、聖書の中に立ち戻ることをテモテに言って、励ましていました。教会の中に強い圧力となって、違った教えが入ってきている時に、それでも愚直に、「キリスト・イエスに対する信仰による救い(3:15)」を宣べ伝え、そして救いのご計画が啓示されている聖書を教えることに傾注するように、励ましました。テモテは、幼いころから母、祖母から聖書を教わっており、彼こそが健全な教えを保っていたのです。そしてパウロは、「敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受ける。(3:12)」とも話していました。ですから、その違った教えをする者たちは、迫害を避けるような、世に妥協して、実を結ばないような教えをしていたのだと思われます。そんな中で、彼の生涯の最後となる、テモテへの第二の手紙の、さらに最後の言葉を読んでいきます。

1A 御言葉の宣教 1-5

1B 主の前での命令 1-2

1 神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。

パウロは、「おごそかに命じます」と言っています。これは、イエス様が昇天される前に、弟子たちに対して大宣教命令を出された、その命令と同じ威厳と権威をもって語っています。神の御前で、そしてキリスト・イエスの御前で、と言っています。

そして、「生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で」と言っています。これからパウロは、神の御前で、テモテやその他の奉仕者たち、またすべてのクリスチャンが、キリストの審判の前に立つことを話します。キリストが天から来られ、私たちを天に引き上げることにについては、テサロニケ第一 4 章に慰めの希望として書かれています。そこでキリストにあって死んだ者は復活し、生き残っている者はその後で引き上げられることが書かれています。コリント第一 15 章の最後には、生き残っている者たちは一瞬にして変えられることが書かれています。その後で行なわれるのは、キリストの裁きです。私たちがこの地上で行なったことに対して、主は報いを与えられます。コリント人への手紙第二 5 章 10 節にて、こう書いてあります。「なぜなら、私たちはみ

な、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」

キリストの裁きの座は、罪に定められる裁きではありません。これは既に、キリストの十字架によって、私たちの罪は裁かれているからです。私たちが信仰によって、またキリストに愛によって行なったわざに対して、報酬が与えられるときです。「1コリント 4:5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」そしてタラントの喩えにおいては、「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。(マタイ 25:21)」ですから、今、テモテに対して、「どんなに反対があろうとも、どんなに困難であっても、耐え忍びなさい。あなたが申し開きしなければいけないのは、死んだ者と生きている者を裁かれるキリストの御前においてなのだ。」ということです。

そして、「その現われとその御国」と言っています。これは、空中にまで天から降りてこられて私たちが引き上げられる携拳ではなく、キリストが地上に現われること、そしてその後で建てられる神の国のことを話しています。パウロはおそらく、イエス様が弟子たちに言われた、「御国が来ますように」と祈りなさいと命じられた、その御国のことを思っていたのでしょう。自分は死んだ後にずっと天に留まっていて、地上は荒れに荒れ放題になっているのではなく、主ご自身が、罪と不法を終結させるべく地上に戻って来られて、この世を贖われるということを確認していたのです。ですから、私たちキリスト者は悪から救い出されます。この世には終わりがあり、神への反逆にも終わりがあります。キリストが王の王となる神の国が間もなく来ます。

2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

御国が到来した時のことを思って、テモテに対して何をしなければいけないかを教えています。実に、テモテが行なっていること「みことばを宣べ伝え」ることが、人々に御国を受け継がせることができるようにするからです。パウロも、それゆえに、御言葉を宣べ伝え、教えることにいつも心を砕いていました。涙を流しながら労苦して行なっていました。そして主イエス・キリストこそが救い主であることを主張していました。パウロはそのことを、エペソから来た長老に対して語りました。そして、自分がもうエペソには戻って来られないかもしれないと思って、このように話しています。「使徒 20:32 いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです。」みことばこそが、人を救います。「1ペテロ 1:23-25 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主

のことばは、とこしえに変わることがない。」とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。」

そして、パウロはテモテに、「宣べ伝えなさい」と言っています。宣べ伝えるのは、王からその国の民に布告が出たとき、それを伝え、宣言することが、「宣べ伝える」であります。したがって、みことばを、権威をもって宣言することが「みことばを宣べ伝えなさい」ということです。「私はこう思います」「私はああ感じます」というような、自分の意見や感想を伝える場ではなく、みことばに確信をもって、権威をもって伝えるのが牧者の務めです。そして、今読んだように、御言葉そのものが人々を救い、御国に入れさせることができるのです。

そして、「時が良くても悪くてもしっかりやりなさい」とパウロは言っています。時節が良ければ、福音のことばを語るのは、たやすいことです。けれども、終わりの時、困難な時代になっている時に福音の真理を語ることは、不利益をこうむります。迫害に遭います。けれどもこんな時にも、確信をもってみことばを伝えていくことができるのか、が私たちに問われてきます。要は、いつも変わることなく、忠実に御言葉を宣べ伝えられているか？ということであります。

そして、そのことを、「寛容を尽くし」て行ないます。真理のみことばを語れば、必ず反対者が出てきます。自分から離れていく人々も出てきます。しかし主は、人々が悔い改めるのは神ご自身がしてくださることであり、私たちが説得したり、あるいは脅迫したところで、彼らは心をますます頑なにすることはあっても、悔い改めることはないでしょう。神のしもべの姿勢として、テモテにこう教えていました。「2テモテ 2:24-26 主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。それで悪魔に捕えられて思うままにされている人々でも、目ざめてそのわなをのがれることもあるでしょう。」

そして、「絶えず教えながら」と言っています。教えるというのは、基本的に、「聖書を朗読し、はっきりと語り、人々がそこに書かれていることを理解する。」ということでもあります。宣べ伝えることが、福音また御言葉を宣言して、人々に決断を促す色彩が強いのにに対して、教えるのは、その人が聖霊によって真理についての悟りが与えられる、ということです。パウロはテモテに、教えることについても次のような命令を与えていました。「2テモテ 2:15 あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」ですから、テモテに対して、パウロは、聖書を教えながら、なおのこと人々に御言葉を宣言する働きを行なっていきなさいということをお話しています。私たちはしばしば、伝道説教と聖書講解を分けて考えてしまいがちですが、講解説教の中には、福音を宣べ伝える要素や姿勢がなければいけないということです。

そして、「責め、戒め、また勧めなさい。」と言っています。聖書を教えるということそのものに、戒

める要素があることを、私たちは前回学びました。「3:16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」聖書は、私たちを肯定するために書かれたものではありません。むしろ自己否定です。今のあり方が間違っていることを明らかにして、それで主から聖霊によって直していただくために書かれています。それを喜んでいる人は、基本的に、「自分という支配者、専制君主から私は解放された」という喜びがあります。反対に、自分が心の王座にあると、いつまでも自己肯定をしてくれることを望みます。

「責める」のは、罪や過ちを明らかにすることです。主イエスさまは、「その方(聖霊)が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。(ヨハネ 16:8)」と言われました。ご聖霊が、私たちに罪を示してくださいます。悪魔は私たちに罪定めをします。しかし、ご聖霊は、私たちをキリストの十字架に現われている、神の憐れみに向かって走らせます。今、自分が感じている罪意識が、聖霊から来たものなのか、それとも悪魔から来たものなのかを判断するのは、今、その罪意識によってキリストへと導かれているのか、それともキリストから自分が離れているようになっているかを調べればわかることです。また、「戒め」なければいけません。間違っている事をはっきりと話、そしてそこから正しい道へと正されなければいけないことを教えます。そして「勧める」のは、人が行なわなければいけないと分かっていることを、行いへと促すことです。これが牧者や伝道者に与えられている務めですが、ある人がこう言いました。説教者の務めは、「自分は問題ないと思ってくつろいでいる人たちを悩ますべきである。そして、すでに問題を持っていて苦しんでいる人を慰め、励ますべきである。」

2B 耳を貸さない時代 3-5

3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。

「健全な教え」とは、キリストが罪人を救うために来られたという神の恵みを教えます。そして神の御心にかなう生活、敬虔に生きようとするのを教えるものです。これを嫌がるので、エペソの教会では違った教えをして、律法についての話をします。けれども、律法について分かっている訳ではなく、方法論であったり、系図についての空想話であったり、またないことをあったこととして話す作り話であったりします。

そして、「自分につごうの良いことを言うてもらう」ことをします。テモテ第二 3 章にあったように、困難な時代には、自分を愛する者が出てきます。しかし、私たちは自分を愛するのではなく、神と隣人を愛します。そして神と隣人へ愛は、キリストにあって神に愛されたという安心から出てきます。牧者がみことばを宣べ伝え、また健全な教えを教えて、責めて、戒め、そして勧めるのであれば、そこには自分を否み、自分の道を捨てて、神の道を選び取ることが、聞く人々に責任として課せられます。しかし、このようなことを嫌がる人々がたくさん出てきます。自分を愛するために、自分の

あり方を変えたくないと思うので、そのような牧者の教会の中にはいたくなくなります。

そして、「気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め」とあります。自分にとって聞き触りのような言葉を語ってくれる人を探します。それが、感情的なものかもしれません。自分の気分を良くしてくれるようなものかもしれません。また知的なものかもしれません。自分の知的欲求を満たせるものかもしれません。けれども、牧者の務めが、神の權威をもってみことばを宣べ伝え、また健全な教えを教えて、責めて、戒め、そして勧めるのであれば、聞く人々は、自分を否み、自分の道を捨てて、神の道を選び取る責任があります。「寄せ集め」という言葉が、自己中心性を表していますね。初代教会は、家の教会だったので、自分の家に自分に聞き触りのよう教師だけを寄せ集めていたのだと思います。監督や長老によって治められているのではなく、聞いている者たちによって治められている集会です。今でもそのような傾向をもった集会はあるでしょう。また、点々と教会を巡っている人の中にも、とすると、「自分に都合の良いこと」を基準にしているのではないか、と思われることがあります。教会は自分の都合ではなく、神がそこに呼ばれたかどうかで推し量るべきです。

そして、「真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代」であります。聖書に書かれている真理ではなく、何か異なる話を挿入して教会運営をしていきます。ある教会は、伝道に熱心なあまり、死後にも救いのチャンスがあるというセカンド・チャンスを教えました。日本の宣教に熱心なあまり、日ユ同祖論に傾いた人もいます。または精神的に病んでいる人が多いので、精神医学や心理カウンセリングを教会に導入させて、必ずしも真理に書かれていないことが、実際上の教会の中心になっている場合もあるでしょう。そして、社会活動や政治活動を取り入れる人たちは、これまで聖書にはっきりと書かれていないことを、あたかも真理であるかのように語っています。こうやって、真理ではなく空想話に入っていくのです。

4:5 しかし、あなたは、どのようなばあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。

「しかし、あなたは」と言っています。このような教師たちがあなたのところたくさん来ているだろう。またそうした違った教えを教会に持ち込んで、あなたを責め立てる人もいることだろう。また、違った教えを受け入れてしまったので、あなたが語っている健全な教えに耳を傾けない者たちもいるだろう。「しかし、あなたは」であります。テモテを励ましているのです。

一つは、「どのような場合にも慎み」です。慎むの元々の意味は、「しらふである」ということです。酔っていない状態です。パウロがテサロニケの人々に第一の手紙でこう言いました。「5:6-7 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。」表向きは敬虔そうでありながら、実が結ばれていない教えが怒涛のごとくやって来ていました。そして、人々の行ないが変わっていない、暗闇の行ないを改めていない

という状態が続いています。けれども、そうした濁流のような流れに対して、あなた自身は慎み深くしていなさい、ということです。

そして「困難に耐え」ます。3章に書かれていたように、実を結ばない教えが敬虔さの中で浸透しています。そういった困難の中でも耐えなさいと言っています。大事なのは、「大事なことを大事にする」ということです。何が大事かと言いますと、「伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。」ということです。先ほど話したように、牧会者は教えるだけ、あるいは、福音伝道をするだけ、ということではありません。教えながら、御言葉を宣べ伝えます。この務めをやらせない力が常に働きます。巧妙にサタンは、この目的から外れるように私たちが仕向けています。大事なことを大事にしないで、二義的なこと、例えば神学のことであるとか、礼拝の持ち方であるとか、教会の雰囲気であるとか、牧師の人柄であるとか、そうしたことを大事にして、肝心要の神の救いのご計画の中に自分自身を献身させていないのです。先日もある人から、「牧師がきちんと礼拝の後に挨拶しなかった。」ということに怒って、人々に悪口を言いふらしていたという話を聞きました。また、「終末論に違いがある」といって、教会を転々としている人々もいます。注意を逸らすという圧力に対して、私たちは福音宣教という中心部分で対抗するのです。

2A 全うした者への報い 6-8

6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。

パウロはテモテに、務めを全うしなさいと命じた後に、今度は自分自身はその務めを全うしたことを述べています。今や、彼は皇帝ネロによって殺されることが、かなりはっきりしています。そこで彼が死を間近に迎えるにあたって、二つのことを述べています。

一つは、「私は今や注ぎの供え物となります。」であります。これは、旧約聖書にある「注ぎの供え物」のことです。ヤコブが、ベテルに戻ってきて神から語りかけを受けた時に、「石の柱を立てて、その上に注ぎのぶどう酒を注ぎ、またその上に油を注いだ。(創世 35:14)」とあります。そして、幕屋が立てられた後で、祭壇に毎朝、毎夕に捧げる全焼のいけにえとともに、ぶどう酒四分の一を注ぎの供え物としてささげることが書かれています(出エジプト29:40)。そして、子羊のいけにえが捧げられるごとに、捧げられるぶどう酒があることを、民数記 15 章で教えられています。パウロは、これから死刑に処せられますが、それは神に注がれた命であるとみなしました。私たちが、自分の命そのものについて、神に注がれた供え物としてみなしているでしょうか？ローマ 12 章 1 節では、私たちは生ける供え物であるとパウロは言いました。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」その生ける供え物が、今や神に注がれる命となるということです。パウロは、死を前にして、「私は神に注がれた命だった」という思いを持っているのです。

もう一つは、「私が世を去る」です。ここの元々の意味は、テントの杭抜きです。コリント人への手紙第二章には、私たちのからだは、幕屋であるというたとえがされています。「5:1-4 私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちのちのまれてしまうためにです。」地上のからだは幕屋あるいはテントであり、天から与えられる新しいからだは神の建物であると、パウロは言っています。そこで、この肉体から離れるときとして、今、テントの杭を抜くときと表現しているのです。すばらしいですね、パウロは、死ぬ間際になって、自分を神へささげる者、また、御国に入る者という意識の中で生きることができていたのです。

7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

自分が信仰を守り通したことを、二つの言葉で言い表しています。一つは、「勇敢に戦った」ということです。パウロはテモテに、「キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともしてください。(2:3)」と書いていました。そして、「1テモテ 6:12 信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。」とも言いました。戦いなのですから、当然、敵がいます。攻撃があります。むしろなければ、彼らが倒れているのではなく、私たちが敵陣に投降してしまっているのです！永遠の命を得るまでには、信仰を純粋に保ち、聖霊による愛の中に生きる戦いがあります。

そして、もう一つは、「走るべき道のりを走り終え」ということです。競走選手であります。パウロがピリピ人に手紙を書いたときは、「兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕えたなどと考えるはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。(3:13-14)」と言いました。まだ完全にされているのではなく、一心に走っている、と自分のことを表現しましたが、今、死ぬ間際になって、「私は走り抜きました」と言っています。

この二つが、私たちが死ぬ時に言える姿勢として心得ているかどうか？ということでもあります。どこまで自分の人生という家の整理をしているか、であります。どんなことがあっても、敵に背を向けない、倒れても本望だ、主が立ち上がらせてくださると決めたかどうか？まず、戦うことを心に決めたかどうか？もしかしたら、この世の力にある程度のつかって、それで生きていこうという余地を残していないかどうか？また、信仰の競走を走っているけれども、今、信じているということも大事ですが、最後まで走りぬくことを見据えているかどうか？多くの人は初めはよい走りなのですが、終

わる時にあきらめてしまう人が多いです。ある時は、疲れてしまうかもしれません。けれども、聖霊がコーチとなって励ましてくださるし、教会では互いに愛と善行を行なうように励まし、勧めを受けます。そうして死ぬ時まで、または主が来られる時まで走るのです。長距離走だということを知ることには大事ですね。

4:8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

キリスト・イエスが、死んでいる者も生きている者も裁かれるということを初めにお話ししました。主が各人に報いを与えてくださいます。その時に与えられるのが、ここにある「冠」です。ギリシヤ語には、「栄冠」を表す二つの言葉がありますが、一つは「王冠」です。王の冠です。もう一つは、オリンピックの選手がかぶる冠であり、勝利者への冠です。ここでパウロが使っているのは、勝利者への冠のほうです。オリンピックの選手が表彰台で受けるメダルではなく、月桂樹の葉でできた冠を受けました。そのようにして、主イエスは私たちに冠を用意してくださっています。「よくやった。良いしもべだ。」と言われるために、私たちはそれだけのために走ります。人生という長い道のりですが、その道のりそのものが、主なる審判者から冠を受けるための競走なのです。

そこで、いろいろな冠が聖書には書かれています。まず、これは朽ちない冠であることです。「1 コリ9:25 また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」そして、テサロニケ人への手紙では、自分の福音の働きによって救われた人々がいることが、冠をいただく理由になっている部分があります。「1 テサ 2:19 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。」そしてペテロは、しっかりと牧会の働きをした者に対して、大牧者からの冠があることを教えています。「1 ペテ 5:4 そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けるのです。」

そして、ヤコブの手紙には、信仰生活には試練があるけれども、それに耐え抜いた人々には、「いのちの冠」があると約束されています。「1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」そしてスミルナの教会に対しては、これから殉教します。ですから死んでもまた甦ると言う希望を与える、いのちの冠の約束があります。「黙示 2:10 あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけません。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」

そして、フィラデルフィヤの教会に対して、冠が奪われないようにしなさいとイエス様が注意して

おられます。「黙示 3:11 わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。」主がすぐに来られることを待ち望み、それで冠が取られないように気をつけます。

そして、ここテモテへの手紙では、「義の栄冠」です。なぜか？それは、イエス様によって、信仰によって義と認められたその義をしっかりと信仰によって保っていた、ということでもあります。この恵みによる立場を、この世においては猛烈に攻撃してきます。そしてあたかも、自分のしていることは悪いことであるかのような圧力を受けます。しかし、キリストの義に堅く立つのです。そして今、ネロによって犯罪者のようにして裁かれます。しかし、義と認められるのは神ご自身です。自分は神に対して信仰の良心を保ってきたことを、人間によって有罪判決を受けても、天においては神から表彰されるのです。ですからパウロは、「かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。」と言っています。人間の評価は些細なことです。しかし、天においては正しい審判者がおられます。この方を喜ばせるため、この方からの評価を受けるために私たちは動きます。

そして、「私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」と言っています。そうです、これは特別な働きをしたパウロのような人たちだけではありません。全ての人に神は義の冠を授けてくださいます。しかし、真実に信仰を持っている人であれば、「主の現われを慕っている」という思いが与えられています。主の現われを慕うことが、どれだけ大切かが分かるでしょう。主からの報いは、主が現れる時に与えられるのです。

パウロは、いろいろな問題に対処していたコリントの教会に対して手紙を書いた時に、最後の挨拶でこんなことを書きました。「1コリント 16:22 主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。」これはまるで、恋人が他の者たちに愛する人との時間を邪魔されるので、彼らを呪っているかのような言葉であります。主を愛すること、その情熱、ただ主を愛しているから、主が来られることを私は待っています、と言っています。これを邪魔するような要素があれば、退け、呪われよ、と言っているのです。主の現われを慕っているのです。そして、そのような者たちは、自分の義はただキリストから来ることを知っています。自分が何をしたかとか、他の何でもないので、自分が立っているのは、ただキリストの義によってのみだ、ということを知っています。